反逆

第1号
1968年
9月12日

発行・編集者
日本大学
全学共闘会議書記局
千代田区神田三崎町
TEL(293)五〇八一

スト体制を強化せよ！

古田体制の動揺に　最後の鉄槌を

全日大の学友諸君！　九・四、経済学部、法学部に対する官憲導入―バリケード破壊によって、日大闘争は新らたな局面を迎えている。大学当局の全共闘に対する暴力的な弾圧は、彼らの意に反して全共闘の大衆的力を強化するだけである。九・四以後の連日の三崎町における攻防戦は、大衆的実力闘争を一層発展させた。われわれは、これを基礎にして全共闘、学部闘争委員の更なる強化を図り、全学友がこの下に団結することによって、古田体制への最後の鉄槌を加えなければならない。

闘いの新局面

九月四日未明、大学当局は、前日の東京地裁における仮処分決定に基づいて、機動隊数千の動員により暴力的バリケード破壊を行なった。同時に、百日に及ぶ闘いを続け夏休み中もバリケードの中で闘い続けてきた先進的学友一三一名を逮捕し、かつリンチ的な暴力的弾圧を行なった。

この事態は、大学当局の反学生的本質を暴露するものに他ならない。彼らは、われわれが長期の闘いを通して求めている大学の民主化について、一切答えることなく「一般学生は授業を受けたがっている」との美名の下に、「正常化」に名を借りた暴力的弾圧を加えてきたのである。そもそも、あのような暴挙と「正常化」＝授業再開とは矛盾するものであり、当局がめざしている事は、学生への弾圧と古田体制下の抑圧と反動教育の復活に他ならない。

それ故、経・法両闘争委員会のバリケード防衛の徹底抗戦は、古田体制下の暗黒への復活を阻止し古田体制打倒の闘いを堅持し、一層強化するための突破口を切り開く闘いであった。この英雄的闘いを引き継ぎ、敵のあらゆる弾圧をはねのける正義の暴力と大衆的スト体制の強化がわれわれに課せられている。

われわれは、八月段階において九月闘争の基本的任務を、全共闘の下に全ての学友が団結し、スト体制を強化すること、そのために学生内の意見の違いを徹底した討論によって止揚すること、就中、夏休み中も闘争委員会の下で闘いながら、闘いの意義や任務について深めてきた認識を全学友のものにすることによって古田体制打倒の非妥協的団結を構築すること、と定めていた。九・四に始まる大学当局の巧妙な団結は、この任務を遂行する上で全く「良い条件」をつくり出した。つまり、彼らの暴力弾圧によって、多くの学友が古田体制の本質を再認識させられたのである。だから、九・四に始まる連日の経・法奪還の攻防戦を大衆的、戦闘的に闘い抜くことが出来たのである。

われわれは九・四未明のバリケード撤去と言う攻撃に直面して、理工、文理その他の拠点の強化―経・法の奪還へという方針を提起した。この路線に基づいたこの闘いによって、今や全学的スト体制の貫徹と大衆的強化が、現在的任務として提起されている。官憲導入によって、闘いを押しつぶそうとした当局は、われわれの大衆的戦闘的反撃によって、その弱さを露呈し、古田体制は根底からの動揺を開始した。この動揺を一層促進し、古田打倒を破壊する光明がわれわれを照らしている。敵の攻撃によって切り開かれた闘いの新局面は、われわれの反撃闘争の前進によって、闘争の勝利への新局面に転化したのである。

徹底抗戦の意義

この勝利への新局面は、九・四当日からの実力闘争―攻防戦によって切り開かれた。

九・四、理工学部九号館予定地に結集した約三千名の学友は、未明の経・法に対する官憲導入に満心の怒りをこめて起ち上った学友であった。集会では、この怒りを反撃へ、経・法奪還へ転化することが意思一致され、全共闘旗を先頭にデモ行進が開始された。これに対して、官憲や右翼の暴力部隊が待期していたが、われわれの圧倒的大衆的行進は、これらの弾圧的挑発を許さず、経・法の奪還を成功させた。そして再度頑固なバリケードを築いた。

九・五　早朝、再び地裁執行吏とその作業員と称する白ヘルメット数百人はバリケードを撤去し、机やイスを運び出した。この際も機動隊が出動した。これに対し、われわれは、前日に引き続いて理工に結集し、経、法の奪還をめざした。経、法の周辺には機動隊が待機していたが、全共闘に結集した一万人に及ぶ学友が白山通りを中心に三崎町一帯を埋めつくすデモや官憲の暴力的介入に対し、われわれが真向から対決することなければならない。さらに、官憲の暴力的介入によって、われわれの実力闘争は必然的に高められた。敵の暴力的スト破壊、弾圧に対し、われわれが真向から対決することなければならない。さらに、官憲の暴力的介入によって、われわれの実力闘争は必然的に高められた。敵の暴力的スト破壊、弾圧に対し、われわれが真向から対決

勝利への任務

官憲導入に端を発し、われわれの実力闘争によって切り開かれた闘争の新局面―古田体制の揺動と全共闘の戦列の拡大を押し広げ大衆的スト体制の強固に構築することが、現在の基本的任務である。

古田の政策は「妥協案」による「一般学生」の授業再開要求派への抱き込―学生の分断と全共闘への暴力的弾圧という二面政策である。しかし、九・四官憲導入は、古田の本質を暴露するものであったが故に「妥協案」の現実性をも自から暴露してしまい広範な学友を全共闘の下で団結を促進するものに他ならなかった。更に古田にとって悪いことには、この仮処分申請―官憲導入を古田理事会の独断でやってしまったために、教授会、その他の反対に直面している。

文理教授会は内部から理事者退陣を要求していたが、更に法学部教授会もそのような決議を行ない

また、学部長会議の授業再開決定に反対しているし、官憲導入については、多くの教職員グループが非難声明を出した。このことは、古田の独裁的支配体制が内部から根底的動揺をしていることを示している。ただし、決して、古田を非難しているグループが、学生のことを考えている「良識派」だと考えてはならない。全く醜い内部争いであり、われわれの闘いによって、これまでの古田独裁の下で隠蔽されてきた矛盾が現出したのである。しかし、敵の矛盾の激化はわれわれにとって有利な条件であり、団結した力によってより深化させ古田体制の破綻を獲ち取らねばならないのである。

われわれの団結の強化はどのようにしてなされるだろうか。

九・四以降の闘いで、全共闘の下で六月段階のような二万に及ぶ学友が決起している。しかも、実力闘争による古田の攻撃に対する反撃への結集であり、六月段階よりも飛躍的に前進している。

バリケード構築以来、八十日をすぎ、我々の闘いは、思想的にも、組織的にも飛躍を見せている。

二〇億円脱税に端を発したこの闘いは、それまでの種々な、民主化闘争の闘いを継承し、発展したものとして存在する。それが、「古田を倒せ」から「古田体制打倒」「教育の帝国主義的改編阻止」の内容としてあらわれた。

学友諸君！

われわれは、現在の古田体制そのものを打倒することなくしてこの民主化闘争は勝利しえないだろう。古田体制こそは、その目的として一つは産業界の要請に見合った、資本家の思うままの、あるいは資本家の手先を養成することであり、もう一つは現在の日本の、東南アジア再侵略に向けた国内改編―とりわけ、帝国主義侵略軍隊の形成と国内動員体制の確立のための教育政策としてある。それは、社会（政治）に関心を持たない（考えない）人間の養成であり、独占資本の侵略を承認し、その先兵となって働く人間を養成する民族主義、排外主義教育である。

そしてこうした帝国主義的教育政策（共学協同路線、排外主義教育）を貫徹するための中央集権化、学生の自治を認めない（集会等の許可制、学識の枠囲）等の政策としてあらわれてくる。

このような、自民党＝独占資本の教育政策の貫徹された大学のお手本が、日本大学なのだ。

われわれは、このような日本大学が、われわれの授業料でまかなわれていることをふまえ、古田らの脱税が、この教育政策の貫徹のうえにある事を把握し、われわれの闘いは古田打倒から古田体制打倒―民主化として高められなければならない。

学友諸君！

さらに古田には九・四以降の機動隊導入にみられるように、この学生の正義の声を、国家権力、右翼学生らを使い、暴力的に圧殺しようとしている。

ここにおいて、われわれは、平和的な解決そのものはありえないし、彼らが全面的に自己の誤りを認めるまで、断固とした実力闘争をもって闘う必要性を一層強く学びとった。

彼らは八・四の大衆団交を提起しておきながら自らそれを破ったのだ。われわれの残された武器は、実力をもって全学生が団結して闘うことである。

学友諸君！

古田、理事者は、「妥協案」をだして、われわれをごまかそうとしている。だが、この妥協案は何ら問題の解決にならない。彼らは自らの責任を一切回避しようとしている。

彼ら理事会は、今や教授会からも見離され、孤立化しつつある。それが法学部教授会の「全理事退陣要求」であり、経済学部の「仮処分執行反対」である。

われわれは、彼らのこの孤立化を一層促進し、われわれ学生の勝利を勝ちとらねばならない。

彼らは、今や何ら解決策もなくただ、全共闘から学生が離れていくことをまちのぞんでいるにすぎない。授業再開もそうした彼らの意図なのだ。

われわれ学生は、断固としてバリケードを大衆的に強化し、古田理事会に一層の追撃を行なうことにより、勝利をかちとろうではないか

全学共闘会議は、学生の正義の声を代表して、勝利まで、断固、責任をもって闘うことを宣言する。

九月十二日

闘争宣言

―五大スローガン―

全理事は総退陣せよ！
経理を全面公開せよ！
不当処分を白紙撤回せよ！
検閲制度を撤廃せよ！
集会の自由を認めよ！

火花

マスコミの「真実性」

マスコミによる日大闘争の歪曲には目の余るものがある。われわれは、新聞やラジオは真実を伝えるものだと教えられてきた。しかし、この間のわれわれの闘争に関ずる報道を見るとき、それが全くウソであると思わざるを得ない××使途不明金の問題が出た時、マスコミは古田を非難する論調が支配的であり、われわれの決起に対しては非難らしきものがなかった。ところが、九・四以後、それは全く逆転した。「暴力学生が暴れた」「機動隊血ぞめの突撃」「大学側は授業再開のため止むを得ず官憲導入」「一般学生は全共闘の暴力に不安そう」……とこには事実を歪曲した何らかの意図があるとしか考えられない×××九・四からの攻防戦はわれわれが夏休みも返上してバイトをやりながら守り続けたバリケード破壊に対する当然の反撃によって展開された。白山通りでは多くの学友がデモに参加し、討論に参加した。大学と新聞が意識的に分離しようとしている全共闘と「一般学生」の区別など闘いの中ではない。むしろ、行動隊以外のいわゆる「一般学生」こそ投石とスクラムによって官憲を追い放う戦闘を行ったのだ。これは現場にいる人なら誰でも知っている事実だ×××これを歪曲しているとは、何らかの意図があるとしか思われない。ある筋によると、古田は新聞社の社会部長を招いて懇談をやったと言うこれが事実であると思わざるを得ない×××不明金問題を追求するだけなら、支配者にとってそれ程ピンチではない。しかし、現在、日大闘争は古田体制打倒として、支配者の教育政策にもかかわる問題になっているため、彼らは、国家の支配にあるあらゆるものを動員して闘争破壊に乗り出したのである。マスコミの意識的反全共闘宣伝は、そのような一貫に他ならない。マスコミは結局は支配者の都合の良い様にしかならないのである。マスコミは断じて真実を伝えると言う神話をわれわれの闘いによって、打ち破ろう。

一、これまでの教訓

1、「小羊」からの脱皮

この闘争を開始する以前の我々の置かれていた状況はどんなものであったろうか。古田は「日大には学生運動がない」ことを最大の誇りにしていた。その裏には「学生心得」とそれを保障する体育会＝暴力部隊による学生自治活動の圧殺があった。高い学費と学生増員による莫大な収入、それを古田が思うように動かして手下を作り彼の独裁体制の維持を計っていた。学問や研究、教育は「日大精神」の下に統一され、そのことを唯一の条件とし、その他は全くデタラメな運営しか行なわない。「日本精神」という反動的で、かつ抽象的なものを基礎にして、彼の思うがままの大学運営を行なってきたのだ。彼と思想が合わなく気にくわないものは、あらゆる暴力を含むあらゆるしめつけによって学内から追い出してしまう。

この様な古田体制の下で、我々は反抗を奪われ、学内での不自由さを学外での行動によってまぎらわす、という生活を強いられてきた。しかし、我々は反抗をあきらめていたわけではなかった。当局の弾圧に対して諸々の手段で闘ってきたにもかかわらず、その闘いが古田体制内での合法的枠を突破しえない為に敗北を強いられてきた。そして「おとなしい日大生」という形容をぬぐい捨てることはできなかった。これを突破することが長い間、我々には課せられて来た。圧迫が強ければ、強いほど、それへの反撃は強い。この事を我々は実際に示したのが、この間の闘いであった。経済学部における「二〇〇メートルデモ」を突破口に、三千四億使途不明金に対する追求を現実に行動をもってあらわした。

その後の連日の抗議集会、デモは我々の古田に対する追求であったと共にこれまでの圧迫に対する総攻撃であった。我々は「小羊」から脱皮し、古田体制に対する反逆を開始したのである。我々は闘いに対する破壊活動はあらゆる型で展開される。これに打ち勝つ為には、我々の団結を固め、東洋大その他数十校に及んでいる学園闘争は、まったく激しく闘われている。我々の現在の闘争に多くの教訓を与えてくれているところの中央大学、明大駿大、早大、横国大闘争と大学は現在もなお激しく揺れている。大学紛争が、常に起り、いや現在では増々激化したものとして表われ、学生と学校側が常に闘争を何故しているのか。真理の探究の為に大学があるとか〝学問の自由を保障され最高学府としてある〟とか一般的に言われている大学において何故闘争が起きるのか。

大学において大学当局と学生が対立し闘争し合う必要性は一体何かをつきとめなければならない。大学において学生は客観的に学校当局と対立し闘争してきた。大学の中に闘争があることを絶対に隠すことはできない。大学の中に何故闘争が起きるのか。それは大学が本来一体どのような社会的関係の中になんの為に作られているのかを明確にしなければならない。資本主義社会における教育は当然社会諸関係に規定されている。

2、団結の力

我々は、自ら闘争に決起する中から全学共闘会議、学部闘争委員という団結の要を創り出した。いくら多くの学生が起き上っても、それが統一されていなかったならその力は弱いし、すぐに消滅してしまう。団結こそが我々の力である。我々の力を全共闘に集約しそれをもって古田にぶつかって行くことが必要であったし、今それを実現しているのである。この全共闘の下への大衆的団結こそ闘争を支え発展させてきた力であった。闘争委員会、全共闘の団結は既成の自治会、学生会の合法性の枠を乗り越えて形成された。この点が、以前の闘いとの決定的違いであった。使途不明金の問題を徹底して追求していく中で、古田にぶち当った我々は、合法的枠内では何も出来ないことを確認していた。

体制を破壊するには、その枠内を乗り越えた真に闘う団結を創造しなければならなかった。我々はこの苦しい闘いからこのことを学びこの教訓を実践に生かしていったのである。我々の打倒対象である古田体制は、理会等や指導委員会のみならず、諸々の学生組織をもその中に抱括している。体育会や応援団、さらに自治会や学生会までも彼らの支配の道具になっていた。従って、我々の闘争の前進はありえなかったのである。だから闘争委員会、全共闘の闘う団結の創造が、闘争の発展の基であったと言えるのである。全共闘の団結は、きわめて戦闘的なものであった。六・一一の右翼暴力団・体育会の暴力に示されたように、闘いに対する破壊活動はあらゆる型で展開される。これに打ち勝つ為には、我々の団結は相互討論、共同学習等の活動によって強固になったのである。バリケートストライキは、古田体制を否定し、それを打倒する為の我々の最大の武器なのである。そして、これを保障するのは強固な団結である。

ストライキは秩序の破壊を意味している。しかし、これまでの〝秩序〟は古田体制の下での奴隷の〝秩序〟であり、我々はこの秩序を破壊しなければ古田体制を打倒しえないことを認識し、ストライキによって今までの既成の秩序破壊を成しとげたのである。ストライキは古田体制打倒の第一歩なのである。ストライキの意義は、これだけではない。破壊の第一歩であるとともに我々学生の秩序の形成を意味しているのである。だから我々はバリケート内における規律を、与えられたものではなく、我々自身の規律を重視しなければならない。

組織的な、規律ある行動はストライキ闘争の第一の条件であることを認識しなければならない。

我々はこれまでの闘いの中で、多くの教訓を学んできた。日大闘争は古田体制を一〇万学生の団結によって打ち倒す闘いである。しかし、この闘いが大きな社会的反響を巻き起している事実や我々のデモに機動隊が介入する事実そして、東大をはじめ多くの学園紛争が同時に闘われている事実、これらを見たとき、日大闘争が、社会や政治と無関係でないことに気付く。我々は、闘いの中から研究学習活動の中から、この事を学んできた。古田体制は現在の政府、文部省が推進する反動文教政策＝帝国主義的改編の中で位置付けられなければならないし、このように政治的観点を持たなければ古田体制の本質を見抜くことはできないし、真に強固な闘争もできない。

我々がいくら政治から無関心であろうとしても、現実はそれを許さない。ましてや、日大闘争という「社会的事件」にかかわっている我々にとっては「社会問題」として、自らの闘争を把え、その位置を明らかにしていかねばならないのである。このような本質的究明があってこそ、真に古田打倒まで非妥協的に闘い抜く強固な団結が構築されるのである。

3、ストライキ闘争の意義

五、六月の大衆的集会、デモから古田の六・一一団交拒否を契機に我々は法学部を先頭にストライキに突入した。ストライキは、我々の最も組織的実力闘争の表現であり強固な団結の表現である。最初は、六・一一団交否に対する抗議ストの意味をもっていた。さらに、長期ストの中で、我々は自主講座、討論会、学習会を行なってきた。

これは、古田体制の下での無内容な講義、不自由なサークル、研究活動を否定し、我々の自主的活動の展開化を図るものであった。我々の団結は相互討論、共同学習等の活動によって強固になったのである。バリケートストライキは、古田体制を否定し、それを打倒する為の我々の最大の武器なのである。そして、これを保障するのは強固な団結である。

ストライキは秩序の破壊を意味している。しかし、これまでの〝秩序〟は古田体制の下での奴隷の〝秩序〟であり、我々はこの秩序を破壊しなければ古田体制を打倒しえないことを認識し、ストライキによって今までの既成の秩序破壊を成しとげたのである。ストライキは古田体制打倒の第一歩なのである。ストライキの意義は、これだけではない。破壊の第一歩であるとともに我々学生の秩序の形成を意味しているのである。だから我々はバリケート内における規律を、与えられたものではなく、我々自身の規律を重視しなければならない。

組織的な、規律ある行動はストライキ闘争の第一の条件であることを認識しなければならない。

我々はこれまでの闘いの中で、多くの事を学んできた。日大闘争は古田体制を一〇万学生の団結によって打ち倒す闘いである。しかし、この闘いが大きな社会的反響を巻き起している事実や我々のデモに機動隊が介入する事実そして、東大をはじめ多くの学園紛争が同時に闘われている事実、これらを見たとき、日大闘争が、社会や政治と無関係でないことに気付く。我々は、闘いの中から研究学習活動の中から、この事を学んできた。古田体制は現在の政府、文部省が推進する反動文教政策＝帝国主義的改編の中で位置付

二、闘いの意義と任務

1、教育の帝国主義的改編と日大

現在、我々が闘っている日大闘争に対する非難や支援の中からも、多くの事を学んできた。日大闘争は古田体制を一〇万学生の団結によって打ち倒す闘いである。しかし、この闘いが大きな社会的反響を巻き起している事実や我々のデモに機動隊が介入する事実そして、東大をはじめ多くの学園紛争が同時に闘われている事実、これらを見たとき、日大闘争が、社会や政治と無関係でないことに気付く。我々は、闘いの中から研究学習活動の中から、この事を学んできた。古田体制は現在の政府、文部省が推進する反動文教政策＝帝国主義的改編の中で位置付けられなければならないし、このように政治的観点を持たなければ古田体制の本質を見抜くことはできないし、真に強固な闘争もできない。

我々がいくら政治から無関心であろうとしても、現実はそれを許さない。ましてや、日大闘争という「社会的事件」にかかわっている我々にとっては「社会問題」として、自らの闘争を把え、その位置を明らかにしていかねばならないのである。このような本質的究明があってこそ、真に古田打倒まで非妥協的に闘い抜く強固な団結が構築されるのである。

日大闘争の意義と任務

1、教育の帝国主義的改編と日大

現在、我々が闘っている日大闘争は、まったく激しく闘われている。我々の現在の闘争に多くの教訓を与えてくれているところの中央大学、明大駿大、早大、横国大闘争と大学は現在もなお激しく揺れている。大学紛争が、常に起り、いや現在では増々激化したものとして表われ、学生と学校側が常に闘争を何故しているのか。真理の探究の為に大学があるとか〝学問の自由を保障され最高学府としてある〟とか一般的に言われている大学において何故闘争が起きるのか。

大学において大学当局と学生が対立し闘争し合う必要性は一体何かをつきとめなければならない。大学において学生は客観的に学校当局と対立し闘争してきた。大学の中に闘争があることを絶対に隠すことはできない。大学の中に何故闘争が起きるのか。それは大学が本来一体どのような社会的関係の中になんの為に作られているのかを明確にしなければならない。資本主義社会における教育は当然社会諸関係に規定されている。

日大の総資産は一百七十七億（一九六六年現在）にも及ぶ。そのうちに建物があり、土地は北海道から九州までの土地である。また土地の評価価格はその当時のままであり現在の価格から言えば一千億ぐらいにはね上がるものが多くあり実際の資産は全く莫大なものとなるのである。会社の純益にあたる「繰越金」は四一年度においては六十四億円にものぼる。このように学生授業料からの収奪を行う一方、機関事業部なるものを作り、その株式会社なるものに投資し、学生から二重の収奪を行なっている。更に〝日本大学教育後援会〟を昭和三七年に発足し財界との接触をもち、また日本会、総調和会と政界を始め各分野にも影響力をもっている。このように日大は営利主義と帝国主義の指的大学となったのである。これを質徹させる為に学生への弾圧、自治破壊等を徹底的、暴力的、イデオロギー的攻撃をかけている。

古田体制の機構上の問題は中央集権化し本部権力と各学部指導委員会、更に学則31条の検閲制等の

2、古田体制とは何か

古田体制を解明するならば、帝国主義政策の先兵、帝国主義者に反抗せず支配者の言いなりになる人間の養成の場としてこれまでの日大を位置づけそして教育内容、機構、学生対策等にわたりそれを保障する総体として存在したの体制の事を言う。＝現在の帝国主義的教育改編は、日大型への大学の全面的改編を意味している。その意味で日大はその手本としての帝国主義における砦の役割をはたしているのである。それではこの内容が、個別日大にあってどのように表わされているのか更に詳細に渡って解明しなければならない。先に述べた所で、大管法の基礎になっている中教審の〝大学教育の改善について〟と題する答申において明らかにされているような産業界との癒着を明確としているが、古田体制の下での奴隷の〝秩序〟を破壊しなければ古田体制を打倒しえないことを認識し、ストライキによって今までの既成の秩序破壊を成しとげたのである。ストライキは古田体制打倒の第一歩なのである。ストライキの意義は、これだけではない。破壊の第一歩であるとともに我々学生の秩序の形成を意味しているのである。だから我々はバリケート内における規律を、与えられたものではなく、我々自身の規律を重視しなければならない。

組織的な、規律ある行動はストライキ闘争の第一の条件であることを認識しなければならない。

我々はこれまでの闘いの中で、多くの教訓を学んできた。日大闘争は